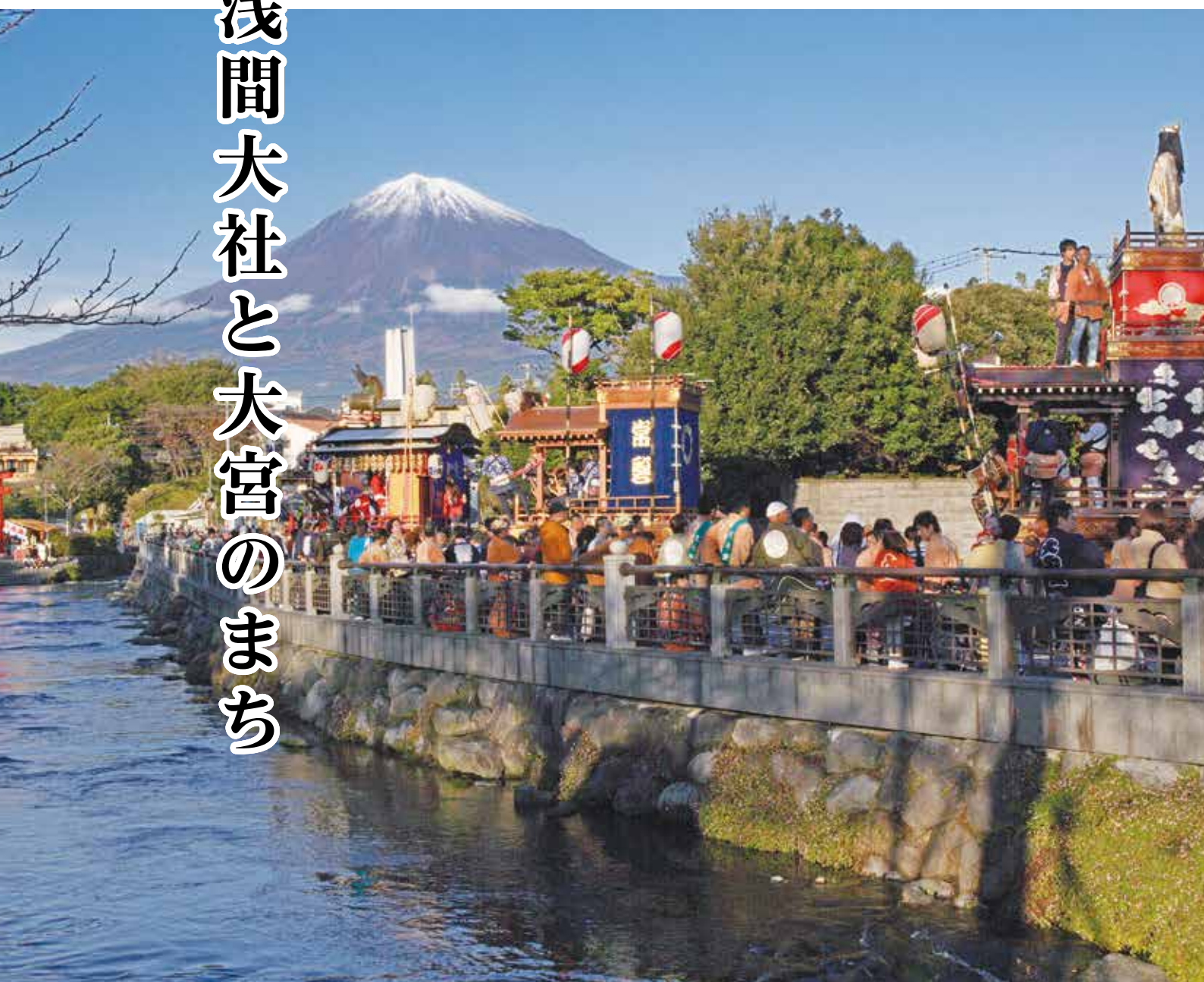


# 第三編

## 富士山本宮浅間大社と大宮のまち



# 第一章 大宮のまちの成立と発展

## 第一節 商いのまちとしての大宮

現在の富士宮市の都市計画では、富士宮市役所・JR西富士宮駅・JR富士宮駅・富士山本宮浅間大社をそれぞれ東西南北の境とする地域一帯が、商業地域（準商業地域も一部含む）として設定されている。この地域は、その名のとおり富士宮市の商業にとって重要な場所の一つであり、人々が集まり商いが営まれてきた「まち」としての長い歴史を持つ。

その歴史を裏付けるものとして、永禄九年（一五六六）に今川氏真が富士兵部少輔（富士山本宮浅間大社の大宮司であり、武将でもあった）に宛てて出した「富士大宮楽市令」という朱印状がよく知られる。富士山本宮浅間大社の御神田に由来するとされる神田町（現大宮町一周辺）に位置する神田市神社は、大正二年（一九一三）に市神石を祀ったもので、この地域に市が立っていたことを物語っている（写真1-1）。

明治二五年（一八九二）に刊行された『富士山幻燈会説明書』では、駿河湾側から甲斐国、信濃国へと抜ける街道の玄関口に位置したこの市が、すこぶるにぎやかなものであったことを記している。さらに、信州のあたりまで広がっている「神田の市へ帯買いに」という子守歌は、この市のことを指していると指摘している（野木一八九二）。

神田の市を含めた大宮のまちがにぎわう様子は、江戸時代に記された地誌や紀行文の中にも確認することができる。例えば、文政三



写真 1-1 神田市神社

年（一八二〇）に桑原藤泰が完成させた『駿河記』内に所収された  
 絵図には、大宮浅間の門前に東西に延びる町並みが描かれている（図  
 1-1）。

具体的なまちの状況は、文化一三年（一八一六）から天保五年  
 （一八三四）にかけて編まれた新庄道雄の『駿河国新風土記』にお  
 いて、「大宮町は東海道吉原宿より甲斐国にいたるの大路の駅にし  
 てにぎやかなる所なり」と記されている。それとともに、大宮町  
 は、神田町・中宿町・連雀町・青柳町・後宿・東新町・西新町・  
 田宿・立宿・寺地町という町から構成されており、東西一四・五  
 町（約一・五〜一・六km）、戸数は一〇〇〇戸を超えるとす（新庄  
 一九七五）。この東西の幅は、前述の現在の商業地域とほぼ同じで  
 あり、江戸時代から現在の街区に近い形が整えられていた状況が見  
 て取れる。

また、文久元年（一八六一）に中村（新宮）高平が著した『駿河  
 志料』では、大宮という名称は浅間大宮（富士山本宮浅間大社）に  
 ちなんだものであることを指摘するとともに、周辺地域の中で第一  
 の都会であると述べている（中村 一九三〇）。

紀行文においても、文政六年（一八二三）にこの地を旅した芙蓉  
 亭蟻乗は、大宮のまちについて、「商家軒をならべ、菓種には大宮  
 柴斯、茶も多く諸国へ出す。家並に蚕を養ふ」と記している。さらに、  
 駿府代官であった羽倉簡堂が、文政一〇年（一八二七）にこの地を  
 訪れた際には、「富士山の麓で賑わい、肥沃な場所のため、商いが  
 盛んな場所である。そのため、駿州と甲州の互いの市場があるのも  
 領ける」（『東游日歴』〈富士市立富士文庫蔵〉の漢文を意識）と述  
 べており、江戸時代の大宮のまちは、富士山周辺地域の中でも、人  
 とモノが数多く集まる一大拠点となっていた。

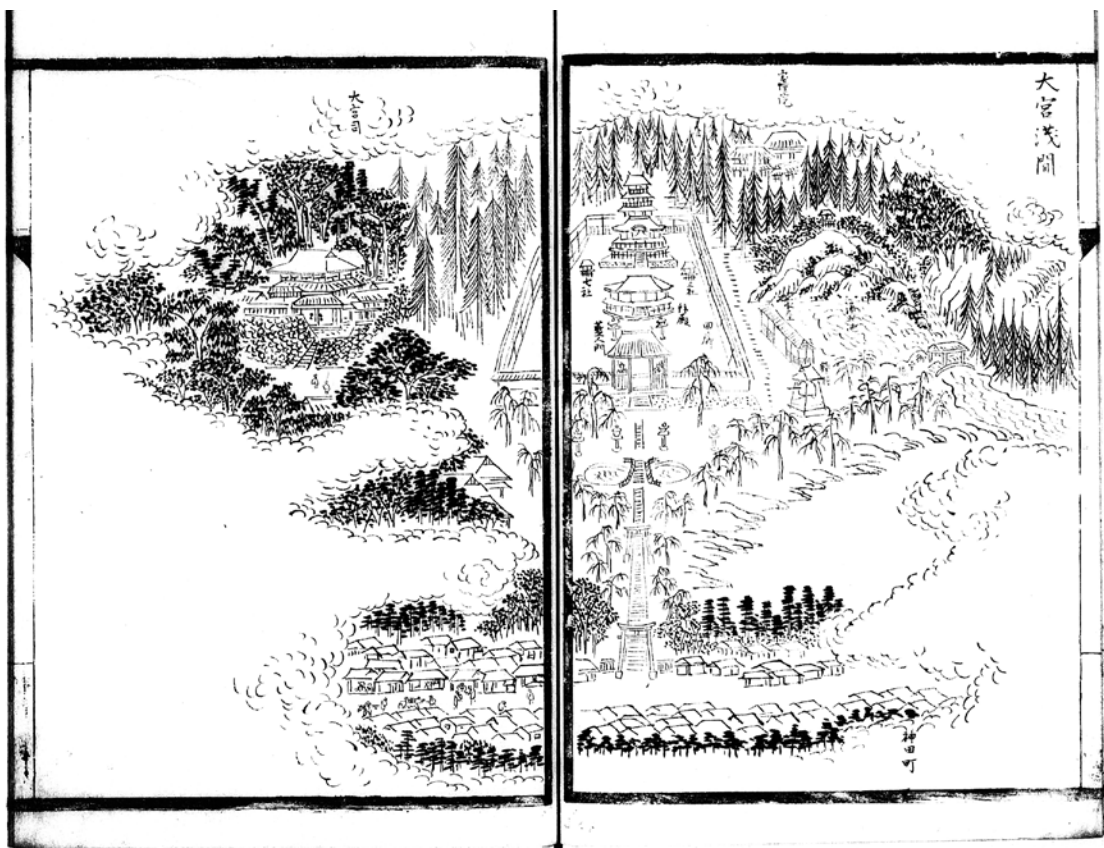


図 1-1 『駿河記』大宮浅間の図（国立国会図書館蔵）

## 第二節 富士登山の拠点としての大宮のまち

大宮のまちは、商いのまちとして商人が集まる場所であっただけでなく、先に取り上げた紀行文の筆者がいずれも富士山への登山者であったことからわかるように、富士山本宮浅間大社を中心とする登山の拠点としての性格も持っていた(図1-2)。

登山の際の状況をより詳細に知ることができるものに、大阪の古銭研究家であった中谷頼山が、享保一八年(一七三三)に記した『富嶽之記』という紀行文がある。そこには、富士山本宮浅間大社の境内と、門前に東西に延びる道(現神田商店街から宮町商店街にかけての地域)の図が描かれるとともに、道の先には、「是ヨリ西二坊アリ」と記されている(図1-3)。この坊とは、登山者が宿泊する道者坊のことである。中谷頼山のように関西からこの地に訪れた登山者は、坊に宿泊しなければならないとされ、それ以外の場所を宿にした場合、超過料金が発生してしまうと述べている。

また、大宮の道者坊については、中世の終わり頃から富士登山が盛んになるにつれて、富士山本宮浅間大社の社人が設置したものとされている(井野邊 一九二八)。同社の社人の一人であった案主富士氏の記録である「大宮導者坊記聞」によれば、一六世紀中頃の享祿・天文年間にはおよそ三〇軒の道者坊が存在していたとされている(浅間神社社務所 一九三二)。江戸時代以降は坊の数はかなり減少したようだが、山切手(入山料を支払ったことを示す書類)の入手だけではなく、山中での装備や食料を確保するうえでも、登山者にとって重要な価値を有していた。

こうした宿坊は、それぞれ担当する地域(檀那場)が異なっており、それぞれの地域の宗教的指導者(先達)や、先達のもとで組織された講集団と密接なつながりを有していた。その様子は、富士山

本宮浅間大社の社人である宮仕四家のうちの二宮仕(一和尙)を務めた清長坊に伝来した資料群に含まれている書簡からもうかがい知ることができると、この書簡は、万延元年(一八六〇)に、伊勢国鈴鹿郡川崎村(現三重県亀山市)の先達である伊藤筑前が清長坊に宛てたものである。それによると、伊藤筑前を宗教的指導者とする周辺地域の人々が登山する際には、紹介状(添状)を清長坊に持参していたこと、そして清長坊に訪れた人々に対しては、富士山のお札や絵図などが授与されていたことがわかる。

なお、安政六年(一八五九)に登山の手引き書として発行された『富士山用達 諸国道中定宿帳』によれば、登山の前に立ち寄るべき大宮の坊として、宮崎春長・宮崎清長・御炊坊・鎰是内記・鎰是頼母の五坊と、各坊で登山の手形を求められることができる旨が記されている(図1-4)。あわせて、下山時の宿として中村屋が推薦されていることから、下山時の宿の指定はなかった状況が見て取れる。

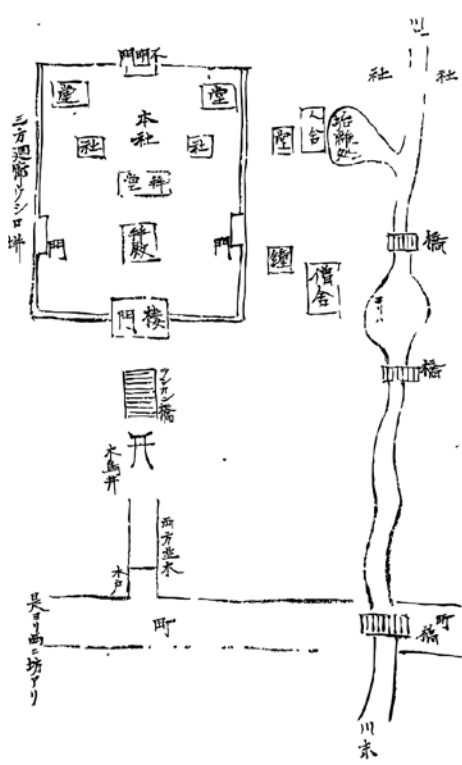


図 1-3 『富嶽之記』(国立公文書館蔵) 所収の浅間大社境内図



図 1-2 吉原宿田子之浦絵圖  
(静岡県富士山世界遺産センター蔵)



図 1-4 『富士山用達 諸国道中定宿帳』(村山浅間神社蔵)

### 第三節 明治時代以降の産業の発展

ここまで取り上げたように、江戸時代から商いのまち、そして富士登山の拠点としての性格を有していた大宮のまちは、明治時代以降にその性格を維持しながら、大きく発展していくことになる。その大きな要因として、東海道線の鈴川停車場(明治一六年(一八八三)開駅)から、富士製紙第一工場が設けられた入山瀬を経て、大宮へと至る富士馬車鉄道が明治二三年(一八九〇)に開通したことがあげられる。さらに、明治四二年(一九〇九)には、大宮から上井出を結ぶ馬車鉄道である富士軌道が開通する(大正元年(一九一二)には上井出から入穴間(ひとあな)が延伸)。また、ほぼ時を同じくして、前述の富士馬車鉄道(明治四二年に富士鉄道に改称)が富士身延鉄道に買収され、大正二年(一九一三)に富士駅と大宮町駅間が蒸気機関車で結ばれることとなった。その後も富士身延鉄道は延伸をしながら、大正九年(一九二〇)には身延駅まで、そして昭和三年(一九二八)には甲府駅まで全線開通し、従来の富士川を利用した南北の物流が鉄道による物流へと完全に置き換わることとなった。こうした明治・大正そして昭和初期にかけての鉄道の発達は、大宮のまちに多くの人とモノの移動をもたらし、まちの姿は大きく変わっていくこととなる。

その当時の様子を知ることができる資料として、明治四一年(一九〇八)に発行された『実測富士山案内図』という地図がある。この地図は、静岡県駿東郡原町(現沼津市原)の増田久七郎(まうしちろう)という人物が製図ならびに発行したもので、当時の東海道線から富士山へ向かうルートや登山道、そして山頂の史跡などについて記されている。そのなかでも、大宮・村山口登山道の拠点となっていた大宮のまちについて、街区の状況が詳細に記されている(図1-5)。

この地図からは、大宮のまちを構成する町として、東から新宿町・青柳町・伝馬町・連雀町・仲宿町・神田町・北神田町・神田橋町・城山町・西新町・宮本町・田宿町・寺地・松山町・立宿町・新立宿町の名を確認することができる。先に取り上げた江戸時代の『駿河国新風土記』には見られなかった町があり、幕末から明治時代にかけて、まちの範囲が拡大し、居住者も増加していった様子が見える。

さらに、まちの中には三カ所の製糸場が存在している。先に取り上げた江戸時代の芙蓉亭(ふようてい)蠶乗(たじま)の紀行文には、「家並みに蚕を養う」とあるが、単に各家庭で蚕を育てるだけでなく、蚕から糸を取るという仕事も、大宮のまちにおいて定着していた様子が見られる。

また、現在の市民文化会館や図書館が位置する場所には、「大蔵省用地葉烟草(たばこ)収納所」という記載を確認することができる。これは、明治三一年(一八九八)に政府の出先機関として設置された煙草専売所のことである。この専売所が設置される前から、富士山周辺では、名産富士葉煙草というブランドのもとで煙草の製造販売に従事する者が少なくなかったとされる(富士宮市史編纂委員会一九八六)。大宮のまちの中に政府による専売所が設置されることで、周辺の葉煙草生産者に安定した収入がもたらされる事に加え、煙草製造業が新たな産業として多くの雇用を生み出す契機となった。なお、富士宮市内には、現在でも煙草の乾燥室がいくつか現存しており、当時の葉煙草の生産状況を知ることができる。

製糸業、そして煙草製造業という産業が定着した後の大正三年（一九一四）に発行された『静岡県富士郡誌』には、その当時の大宮のまちの様子を以下のように書き留められている。

大宮町は明治二十二年町村自治制施行の際、黒田、山本、貫戸、星山、沼久保、安居山の六箇村を合せて一町となし、一自治区をなせり。東西一里、南北二里五町、面積二・三九方里、富士郡北部の都会にして、神田の清流市街の中央を貫通し、吉原町を距る北方二里十八町、戸数二千二百、人口一万三千余、吉原警察署大宮分署、吉原区裁判所大宮出張所、郵便局、秦野専売支局大宮出張所、町役場、銀行、小学校、町立実科高等女学校、羽二重大宮実習所、工場等あり。劇場は咲花、松鶴の二座あり。旅舎兼割烹店の重なるものは、梅月、偕楽園、中村屋、海松楼とす。馬車鉄道は鈴川より吉原町を経、鷹岡村入山瀬に於て軽便鉄道となりて當町に達し、北方に軌道馬車ありて上井出に達す。又潤川ありて灌漑に便す。頭を挙げれば富士の霊峰中央に聳ゆ、加ふるに勝地を以て著はるる浅間官幣大社あり、花時の観桜、夏日の納涼等実に清遊の好適地たり。

この記述からわかるように、明治時代の末から大正時代にかけての時期には、大宮のまちは富士山の南西麓において、一大商圈を構え、まちとして成立していたのである。

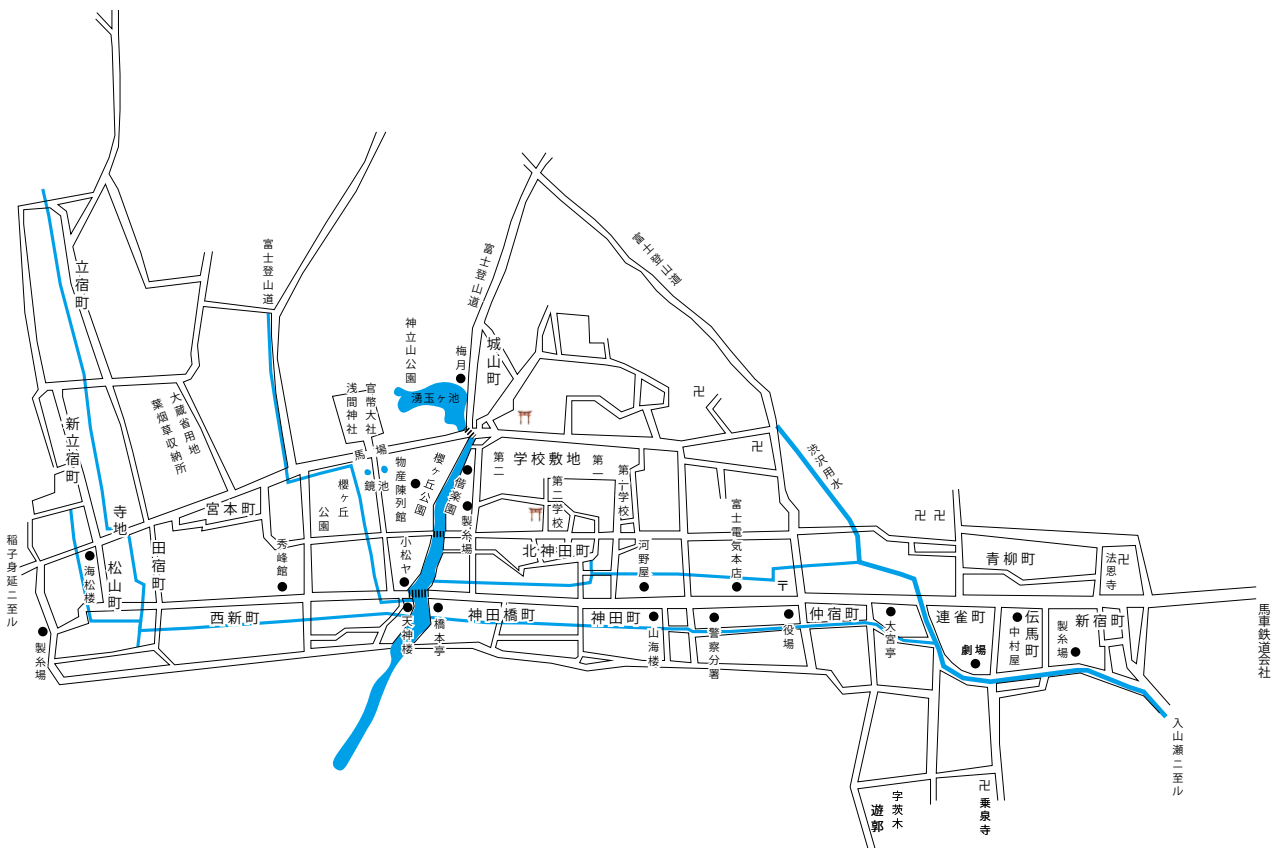


図 1-5 『実測富士山案内図』トレース図

## 第四節 新たな登山道の開発と観光のまち

ここまで述べてきたように、明治期から昭和初期にかけての交通手段の発達を背景に、大宮のまちにはいくつかの産業が定着した。それとともに、明治三十九年（一九〇六）には、従来の大宮・村山口登山道に加えて、老若男女が楽しめるレジャーとしての富士登山を前提とする大宮口新道（カケスバタ口）という新たな登山道が開かれた。

当時、この新たな登山道の整備や登山者に対するサービスを一手に担っていた富士表山休泊営業合資会社が明治四十二年（一九〇九）に発行した「富士山表口登山案内図」には、「表口は風景名所古跡に富めり」として、富士山本宮浅間大社をはじめとする富士宮市内の神社仏閣、白糸の滝、源頼朝や曾我兄弟のゆかりの場所などが掲載されている（図1-6）。

さらに、大正の広重とも称され、全国各地の観光地や市街地を空から眺めたような視点で描く、いわゆる鳥瞰図を数多く制作した吉田初三郎による、大正八年（一九一九）の「官幣大社富士山名所図絵」（発行は富士山本宮浅間大社）にも東海道線から大宮、そして身延へと至る富士身延鉄道や、大宮から上井出に至る富士軌道の路線とともに、沿線の名所が描かれている（図1-7）。

明治時代から大正時代にかけて発行されたこれらの図からは、大宮のまちは単なる登山の拠点だけでなく、富士山南西麓の観光の拠点としての性格を有するようになっていたことが指摘できる。

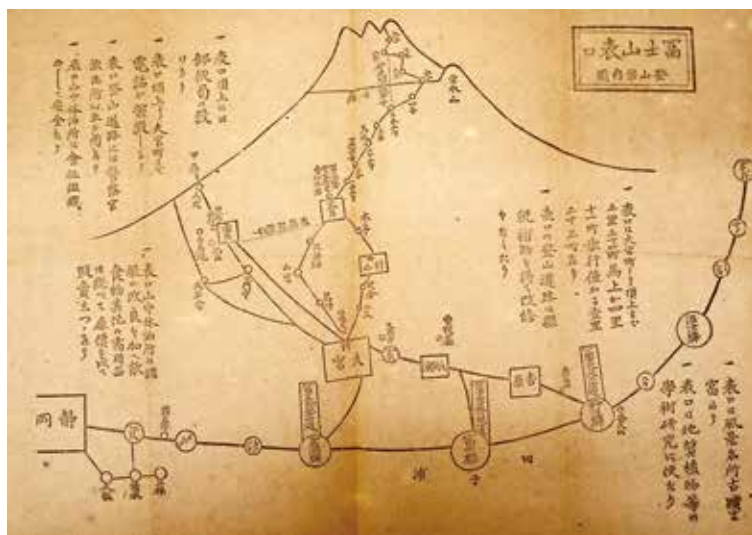


図 1-6 富士山表口案内図（静岡県富士山世界遺産センター蔵）



図 1-7 官幣大社富士山名所図絵（静岡県富士山世界遺産センター蔵）

## 第五節 地図からみる大宮のまち

この時期の大宮のまちの様子については、大正一五年（一九二六）に東京交通社が発行した「大日本職業別明細図（静岡県富士郡）」から詳細に知ることができる。この大日本職業別明細図は、大正六年（一九一七）に木谷佐一が興した東京交通社が、市街地図のシリーズものとして、全国各地の市街地を対象に定期的に刊行したものである。東京交通社発足から第二次世界大戦による統制が行われる昭和一七年（一九四二）にかけての二五年間で、七〇〇点を超える市街地図が発行されており、全国を共時的に、ほぼ同一の基準で発行された市街地図として、市街地の復原や都市機能の検討に有効な資料であるとされている（河野 二〇〇八）。なお、この大日本職業別明細図には、発行順を示す号数が付与されており、大宮のまちを含む静岡県富士郡は一九となっており、静岡県内では、浜松市（二五・六八・二四七）・見付町（二六）・熱海温泉（二二）・長岡温泉（九五）・清水市（一一七）に次ぐもので、この地域における市街地図の需要が静岡県内でも高かった状況がうかがえる。

大日本職業別明細図は共通して、表面に横軸をイロハ順、縦軸を数字順に区切ったグリッドを設け、そこに市街地が平面図で描かれ、地図の中に公共施設や商工業者の名称が記される。「大日本職業別明細図（静岡県富士郡）」も例外ではなく、富士郡全体の交通図および、大宮町・富士川町・吉原町・富士駅前・蒲原町・由比町・興津町の市街地図と富士郡各地と題され、広範囲を収めた市街地図が所収されている。その地図とともに、各地の社寺や商工業者の写真が数点掲載される。この地図を一見すると、大宮町は、ほかの場所と比較して街区が広く、さらに掲載された商工業者の情報が多く、富士郡の中で随一の町であったことがわかる（図1-8・図1-9）。



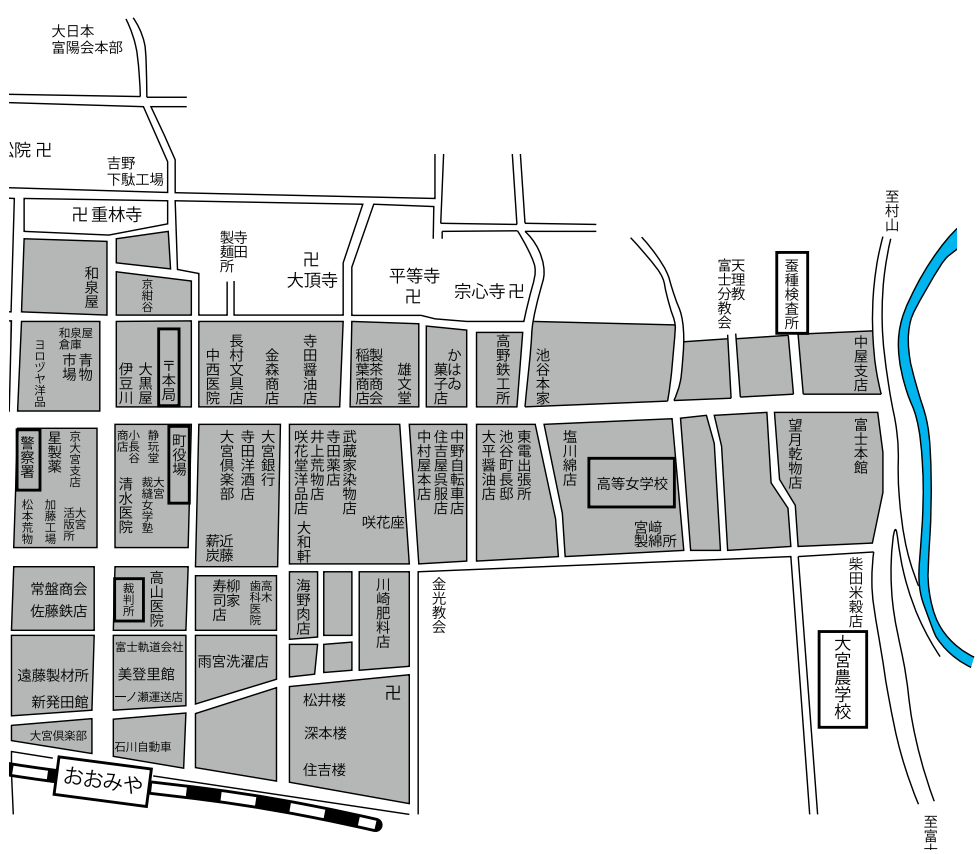
図 1-8 大日本職業別明細図（静岡県富士郡）表面全体（国立国会図書館蔵）

また、裏面上段には、富士郡の地勢・主要物産・名所旧跡などの沿革、各地区間の距離が記される。その下からは、営業別索引として、官公庁・学校・社寺・銀行の名称が掲載される。銀行に続いて、イロハ順で五一種に分類された業種ごとに店舗名の名称が並ぶ。それぞれの名称には、該当地区および縦軸・横軸のグリッド番号が付記されており、容易に表面の地図で場所が特定できるようになっている。大宮町に関しては、このうちの四五種について名称の記載を確認することができ、富士郡の中でも群を抜いて多様な業種が存在するまちであったことが指摘できる。

表1-1は裏面の索引に記された名称を業種ごとに分類し、その数を示したものである。大日本職業別明細図への掲載は、発行元の東京交通社による各業者の納税額に基づく判断（納税していることで信用できる業者と判断された）と、各業者が掲載料を支払ったかどうかという基準があるため、当時存在した全ての業者が掲載されているとは言えない。しかしながら、当時のまちの状況を十分に把握することが可能であると言える。

この表1-1に示したように、富士郡全体の業者名の掲載件数のうち、大宮町の業者が占める割合は二二％となっている。富士郡を八地域に分けて掲載していることを考慮すると、周辺地域と比較して明らかに大宮町の掲載割合が高く、商業面においては富士郡をリードする存在であったことがわかる。

また、富士郡全体における大宮町の割合が五〇％以上となる業種として、呉服太物商・印刷業・荒物雑貨商・家具指物商・妓楼・染物業・茶商・飲食店・市場・油商・食料品商・製糸および製綿業・写真業があげられる。これらの業種が大宮のまちを特徴づけていたとも指摘できる。



業種名	大宮町の掲載件数	富士郡全体の掲載件数	富士郡全体における大宮町の割合	業種名	大宮町の掲載件数	富士郡全体の掲載件数	富士郡全体における大宮町の割合
社寺教会及名所	15	149	10%	売店	0	5	0%
諸業	9	77	12%	妓楼	4	4	100%
官衙学校	9	66	14%	染物業	3	4	75%
旅館	9	37	24%	鉄工所	1	4	25%
医院	16	34	47%	茶商	2	3	67%
酒醬油味噌商	10	33	30%	足袋商	1	3	33%
銀行会社	7	30	23%	新聞業	1	3	33%
自動車及び自転車業	2	25	8%	製紙業	0	3	0%
運送業	2	18	11%	飲食店	2	2	100%
薬商	7	17	41%	市場	1	2	50%
菓子商	4	15	27%	油商	1	2	50%
料理店	4	13	31%	食料品商	1	2	50%
洋品雑貨商	2	11	18%	製糸および製綿業	1	2	50%
材木商および製材業	2	11	18%	煙草商	0	2	0%
工場及び製作所	1	10	10%	小間物化粧品商	0	2	0%
米穀肥料商	3	9	33%	写真業	1	1	100%
呉服太物商	6	8	75%	履物商	0	1	0%
演芸娯楽場	2	8	25%	提灯商	0	1	0%
雑貨商	0	8	0%	海産乾物商	0	1	0%
印刷業	4	7	57%	畳商	0	1	0%
荒物雑貨商	4	7	57%	魚商	0	1	0%
金物商	3	7	43%	靴商	0	1	0%
書籍文房具商	3	7	43%	婚礼家具商	0	1	0%
家具指物商	5	6	83%	工業所	0	1	0%
時計商	1	6	17%	機械器具商	0	1	0%
組合	1	6	17%	製麺業	0	1	0%
銘家	2	5	40%	合計	152	684	22%

表 1-1 業種ごとの富士郡全体の掲載件数と大宮町の掲載件数  
 富士郡における大宮町の掲載件数が50%以上のものをマーカーで示す。

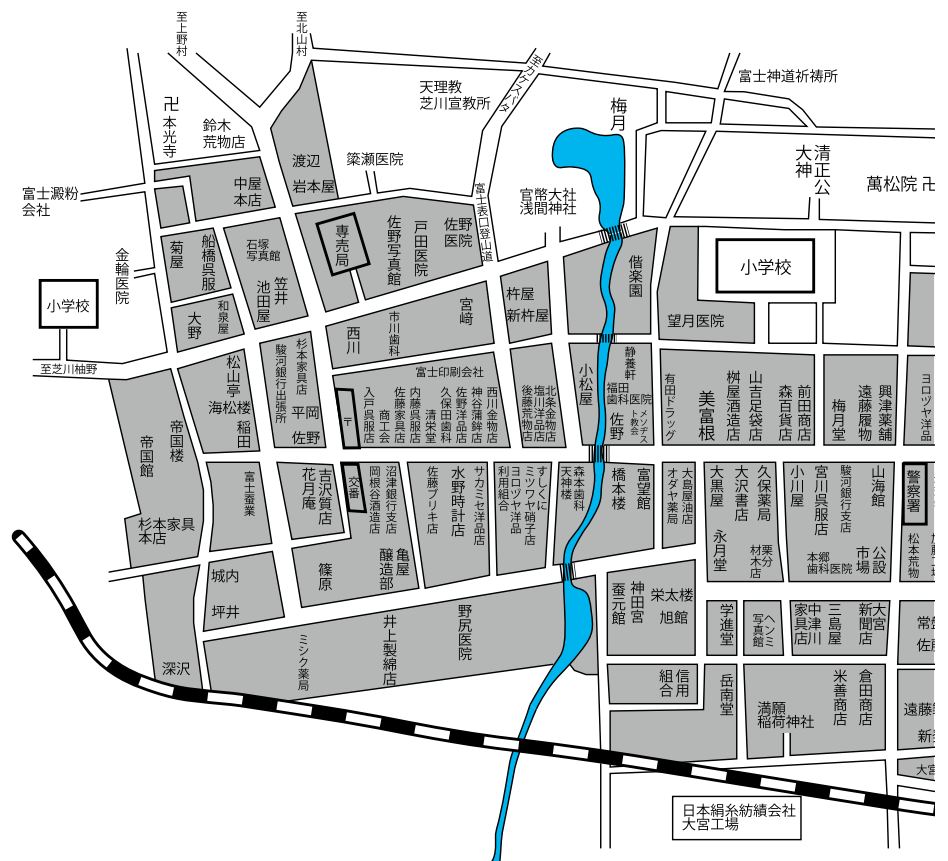
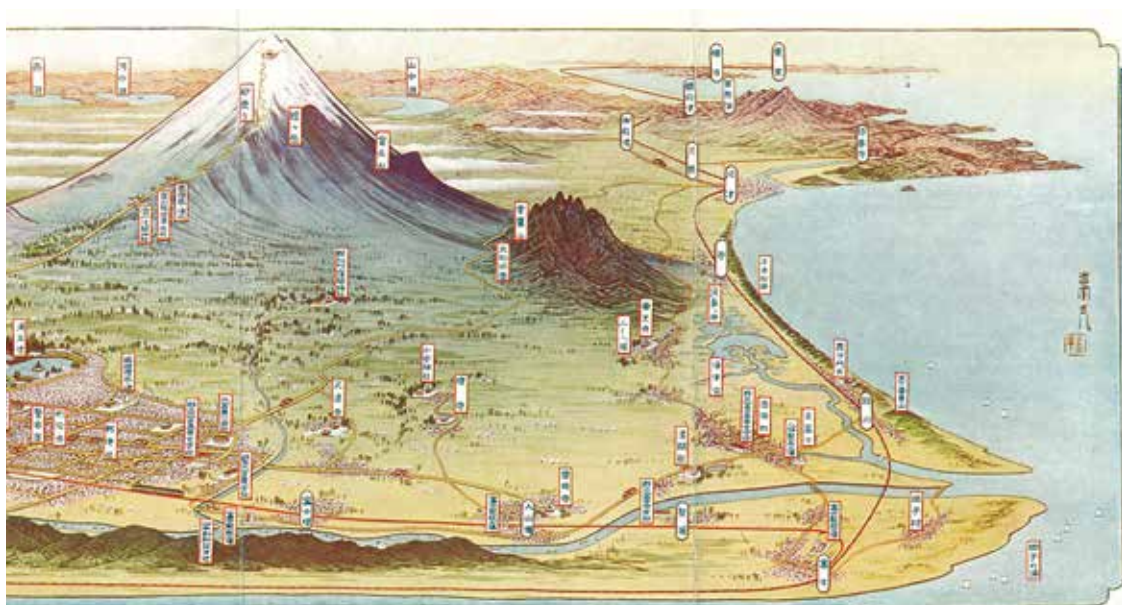


図 1-9 大日本職業別明細図 大宮町トレース図

やや時代が進んだ昭和六年（一九三二）には、前節に掲載した「官幣大社富士山名所図絵」（図1-6）の作者である吉田初三郎のもとで技術を磨き、独立後は初三郎最大のライバルとされた鳥瞰図（ちようかんず）絵師、金子常光（つねみつ）が大宮町役場の依頼で、「国立公園 富士と大宮」と題する鳥瞰図を所収した観光パンフレットを制作した（図1-10）。これは、同年に施行された国立公園法に基づき指定される国立公園の候補地として、富士山麓の指定を目指した大宮町の積極的な動きの成果物であるといえるとともに、当時の大宮のまちの状況を知ることができる貴重な資料でもある。

この観光パンフレットに所収された鳥瞰図には、富士山の麓に大きく広がる大宮のまちの様子が描かれる。特に、富士山本宮浅間大社の境内がひときわ目立つように描かれていることから、富士山本宮浅間大社を中心とするまちという意識を示すものだといえる。さらに、まちの中に記された施設の情報に注目すると、町役場や警察署、学校に加えて、富士繭市場（まゆ）、日本絹糸会社（にし）、専売局出張所といった施設も確認することができる。明治時代に定着した、大宮のまち周辺での養蚕（ようさん）や煙草栽培（たばこ）によって生産されたものが大宮のまちに集まり、全国へ出荷されていくというこの地域の産業のスタイルが、昭和初期においても非常に重要性が高かったものといえるだろう。

鳥瞰図の裏面には、大宮のまちの概要として、「北に秀麗（しゅうれい）の富士を負い、南に田子の浦の絶景を臨み、いわゆる山紫水明（さんしすいめい）なる岳麓（たけがし）の小都会で人口約三万、付近には名所旧跡、原始民族の遺跡、古墳等（こぶら）が頗（おほ）る多い、登山期には合力（ごうりき）、馬丁（ばてい）、自動車、旅館同盟会等が駅前へ登山案内所を設けて専ら登山者の便宜を計っている」とあり、観光のまちとしての姿も記される。そのことを示すように、周辺の名所旧跡の概要が記されるが、それらに訪れる手段として、大宮のまちからの乗合自動車の運行情報も掲載されている。



## 第六節 大宮町大火と復興後のまち

昭和七年（一九三二）四月二日夜、栄町（現大宮町二八周辺）で発生した火災は、強風の影響もあり、瞬く間に大宮のまちに広がっていった。不幸にも渋沢用水が工事中ということもあり、鎮火まで約七時間を要した。その延焼範囲は、神田川から東側に位置する一五町（現大宮町・中央町・東町）に及び、全焼家屋数は一一二〇戸、罹災者数は四九一四人を数えた。

「大宮町大火」と呼ばれたこの火災により、先に取り上げた鳥瞰図「国立公園富士と大宮」（図1-10）に描かれたようなまちの風景は失われてしまったが、官民あげての復興事業が行われ、昭和九年（一九三四）に復興記念祭が開かれている。復興事業に伴い発行された『岳麓大観・大宮町復興記念』には、火災前後の町並みの写真や、新築された官公庁や商店の写真が掲載され、まちの様子が大きく変化することがわかる（図1-11）。

その後、大宮のまちは戦争による空襲被害を受けていないことに加え、大宮町大火以降に大きな火災が起こっていないことから、当時の町並みが少しずつ形を変えながら、現在へと至っている。その歴史の中で、煙草専売所の廃止、オーミケンシ株式会社への撤退などの一方で、大宮のまちの周辺に新たに富士フィルム株式会社やテルモ株式会社の工場が設置されるなど、明治時代に大宮のまちに定着した産業構造は大きく変化している。また、大宮町自体も合併により富士宮市となり、その後も幾度かの市町村合併を経て市域を広げてきた。こうした経緯がありながらも、富士山本宮浅間大社を中心とするまちの姿は長く変わらずに保ち続けられている。



図 1-11 『岳麓大観 大宮町復興記念』（個人蔵）

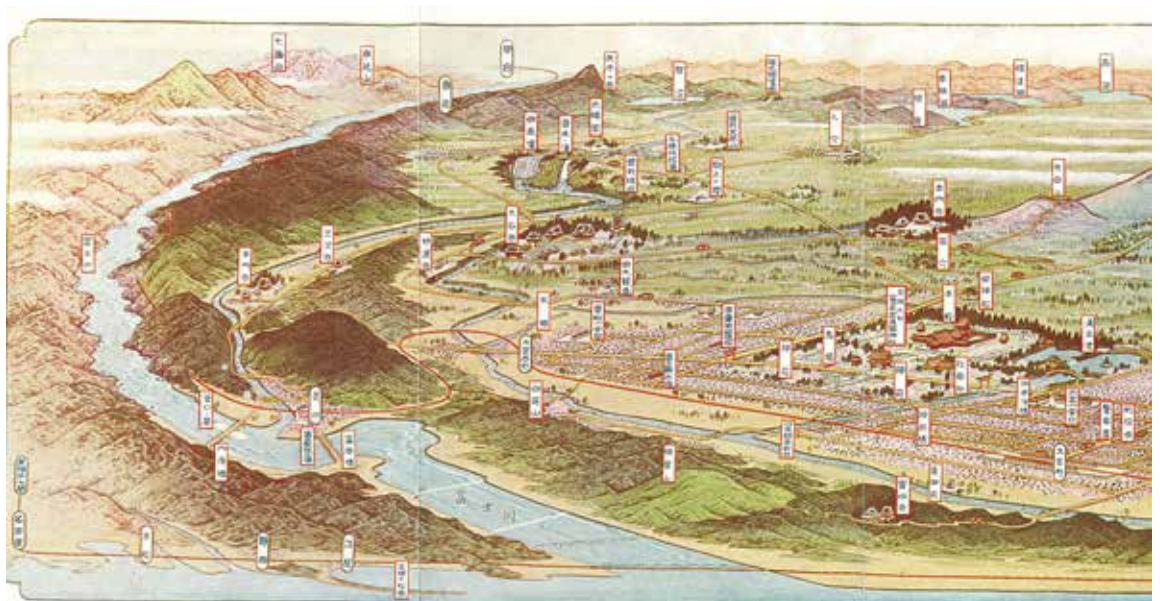


図 1-10 国立公園 富士と大宮（個人蔵）